

第2章 歴史文化の特性

1. 添田町の歴史文化の特性

第1章の添田町の概要（自然的・地理的環境、社会的環境、歴史的環境、文化財の概要）を踏まえ、本町の歴史文化の特性を7つに整理する。

①英彦山^{ひこさん}を頂とする厳しくも豊かな自然環境

【概要】

本町を象徴する霊峰「英彦山」は、豊かな自然と生態系を育んでおり、古くから人々の信仰を集め、地域の文化の形成に大きな役割を果たしている。

本町の南側、大分県境に位置する霊峰「英彦山」は、低山が連なる筑紫山地^{つくしさんち}の高峰として筑豊盆地^{ちくほうぼんち}のどこからでもその姿が望める。本町の大部分は山間部であり、南部の英彦山山麓から北西に向かって狭小な盆地が広がる。火山活動と河川の浸食で形成された本町の地形は、雄大な自然景観を生み出している。また、北西側の平野部と英彦山山頂は、標高差1,100m以上あり、山間部は冬季氷点下まで下がる等、気象条件が大きく異なるために本町の植生は多様である。英彦山は自然崇拝の霊場として古代から人々により大切に護られてきたことも相まって豊かな生態系が育まれている。また、「水分神の山」^{みくまりかみ}として遠賀川^{おんががわ}、今川^{いまがわ}等の主要河川が英彦山を源として、里山の集落を通り、田畑を潤している。

英彦山を頂とする地形・植生・水系による厳しくも豊かな自然環境は、人々の信仰に護られ、耶馬日田英彦山^{やまひたひこさん}国定公園に選定された美しい景観も育み、本町の歴史文化の特性といえる。



英彦山と周辺の山々



冬の英彦山参道の様子

②英彦山から流れる河川沿いに広がる黎明期の人々の営み

【概要】

英彦山から流れる河川沿いでは、縄文時代から平安時代の遺跡や出土品が多く見つかり、豊かな自然を背景として古代からの人々の生活が営まれている。

本町は英彦山の地形や植生による豊かな自然環境を背景として、今川、彦山川、中元寺川に面した山あいの扇状地や河岸段丘を利用して縄文時代から人々の営みが育まれてきた。9,000年前の狩猟用落とし穴遺構や土壇墓出土のヒスイ製大珠等、当時の暮らしぶりがうかがわれる遺跡や出土品が津野地区の今川沿いで発見され、彦山川に面した丘陵部では弥生時代の青銅器鋳型の出土や古墳が確認されている。中元寺地区の中元寺川等で奈良時代から平安時代の地方官庁跡と見られる建物跡や遺物が出土している。

英彦山から流れる河川沿いで確認された縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡や出土品から読み取れる特徴的な人々の営みは、本町の黎明期の歴史文化の特性といえる。



宮の前遺跡と中元寺川



観音寺遺跡



後遺跡の土壇墓

③英彦山修験道の伝統行事

【概要】

英彦山修験道を起源とする五穀豊穡を願う農耕儀礼は、形を変えながら今日まで続けられている、地域の歴史を象徴する伝統行事である。

英彦山の「松会」祭礼は、平安時代中頃の修験道成立期に始まったとされる豊穡祈願の重要な行事であった。明治維新の廃仏毀釈、神仏分離の影響により修験道が途絶えた後は、開催時期や形を変えつつ、現在まで英彦山神宮の一連の祭事として継承されている。これらの祭事は、1年の豊作と泰平を祈る柱松神事から始まり、参道の清め祓いに用いる御潮井を汲み、参道をお清めする御潮井採り、五穀豊穡を祈願する御田祭、神幸祭の順に行われ、多くの参詣者を集めている。

また、農耕の神として信仰される高住神社の神幸祭は、英彦山の秋の風物詩となっており、その後高住神社境内で採燈護摩供も執り行われている。

英彦山修験道に由来する農耕儀礼の伝統行事が英彦山神宮、高住神社の祭事として今日まで継承されていることは、本町の歴史文化の特性といえる。



英彦山神宮の神幸祭



英彦山神宮の御潮井採り



高住神社の採燈護摩供

④英彦山山麓に伝承された盆踊り

【概要】

「彦山踊り」をはじめとする英彦山山麓の盆踊りは、夏の風物詩として、歴史的な景観の中で風情を生みだしている。

8月盂蘭盆会に、英彦山山麓^{うらぼんえ}の各集落の祖霊祭で英彦山修験道に由来する盆踊りが催される。英彦山門前地区の「彦山踊り」^{ひこさんおど}は、英彦山門前において笛・太鼓・三味線の鳴り物の音頭と口説きの節に合わせ、踊り手たちが輪になって踊る。彦山踊りは室町時代に京都から伝わったと言われ、英彦山の山伏によって踊り伝えられたものが、地域住民によって今日まで継承されている。8月14日の祖霊祭の後、新盆の家の前や参道沿いの神苑や溜り^{たま}と呼ばれる広場で大きな輪をつくり、菅笠姿^{すががさ}の踊り手が口説きに合いの手を入れながら踊り、英彦山の歴史的な景観の中で風情を生んでいる。この彦山踊りの流れを汲む「松坂踊り」^{まつざかおど}は落合、津野地区をはじめ、田川地方で多く踊られており、また、「ひよひよ踊り」も落合、中元寺地区をはじめ、英彦山山麓域で古くから盆踊りとして伝承されている。

英彦山山麓の集落を中心に伝承された夏の風物詩である祖霊供養の盆踊りは、本町の歴史文化の特性といえる。



彦山踊り



英彦山参道での彦山踊りの様子

⑤英彦山ごんげんこう権現講をはじめとする多様化する英彦山詣で

【概要】

英彦山権現講を中心に九州一円に広まった英彦山詣では、現在も代参や授与品を通じて信仰が受け継がれているとともに、登山といった行楽も加わりながら続いている。

英彦山権現講は、英彦山を信仰する地域の祭礼組織であり、江戸時代には42万戸に達した檀家の英彦山参詣として「彦講」や「権現講」と呼ばれた。古来、英彦山山伏は「歩き」と称して九州各地の檀家まわりを行い、祈祷札や薬を配ることで布施を受けていたが、檀家は彦講、権現講として英彦山参詣を行っていた。松会参詣者8万人という記録もあり、英彦山信仰が九州一円に広がっていたことがわかる。現在でも、佐賀県を中心に代参者を決めて英彦山詣でを行う地区があるほか、神札や英彦山がらを授与所から持ち帰る等の風習が今も見られる。

明治時代以降、英彦山山伏坊舎が衰退した後は、英彦山門前で坊舎が旅館業に転じた花山旅館等が檀家の宿泊先となった。また、これらの旅館は筑豊各地からの炭坑労働者の慰労場所や保養所としても利用され、昭和30年代に登山ブームが起ると英彦山に多くの登山客が訪れた。現在も秋の行楽シーズンには賑わいをみせている。

御田祭、神幸祭等の年中行事や登山を通じて、英彦山に多くの人々が参詣する光景は、現在も英彦山信仰が息づいている姿をあらわしており、本町の歴史文化の特性といえる。



山開きでの英彦山神宮上宮参詣の様子



山開きでの英彦山神宮上宮参詣の様子



登山道の様子

⑥里山にひろがる農耕と奉納芸能

【概要】

英彦山から始まる神幸祭は水の流れのように周辺の里山に広がり、そこで奉納される神楽や獅子楽等は英彦山への信仰と里山の農耕文化の結びつきを今に伝えている。

農耕の予祝祭^{よしゆくさい}として行われる神幸祭は英彦山から始まり、英彦山を源とする河川の水の流れとともに下流域に広がるように、4月から5月の間に時期をずらしながら英彦山麓、里山、平野部の各集落で行われている。4月上旬、稲穂神である天忍穂耳命^{あめののおし ほのみのみこと}の神輿が下る英彦山神宮の神幸祭が行われると、里山の各地域でも神幸祭が行われ、その後田植えが始まる。清流を引き込み、棚田の稲作をはじめとしてさまざまな野菜や花卉等の作物が作られている。

里山の各集落の神幸祭は神輿が御旅所に着座すると神楽や獅子舞、楽打ちが奉納される。落合地区や野田地区で勇壮な獅子舞が舞われ、その後、子供たちが輪になって笛等のお囃子にのせて太鼓を代わるがわる打つ楽打ちが奉納される。津野地区の上津野、下津野の高木神社で修験道文化の影響を受けた豊前神楽の流れを汲む津野神楽^{つののかぐら}が執り行われ、御先鬼が神々を迎える舞を舞う。

英彦山からの清流を用いて営まれる農耕と、その豊穰を祈念し各集落の神幸祭で舞われる神楽や獅子楽等の奉納芸能は、英彦山と里山との深いつながりを示しており、本町の歴史文化の特性といえる。



里山の田園風景



野田獅子楽



津野神楽

⑦英彦山参詣道「日田道」^{ひ た みち}と添田本町のまつり

【概要】

英彦山参詣道である日田道の宿場町として栄えた添田本町の神幸祭は、歴史的建造物が残るまちなかをバレン飾りの山車が巡行し、かつての繁栄に根差した文化が息づいている。

添田地区^{そえだ ほんまち}の添田本町は、岩石城^{がんじやくじょう}の麓、小倉城下と天領日田を結ぶ街道である通称日田道沿いに形成され、英彦山参詣の街道宿の役目を果たして繁栄した。添田本町に国指定文化財である中島家住宅^{なかしま け}や大庄屋中村家の御成門等があり、道中の野田地区に英彦山の松会参詣に草履替えの場所であった庄屋宮田家や、その屋敷前にかつての高札場^{こうさつば}がある等、歴史的建造物が往時の風情を伝える。

添田本町で行われる、添田神社の神幸祭は「ヤマ」と呼ばれる山車に稲穂を象ったバレンを飾り付け、日田道を巡行し、当日の夜は提灯飾りを灯した祇園祭^{ぎ おんまつり}の山鉾山車^{やまぼこ}に姿を変え町内を廻っている。翌日祭りが終わると稲穂飾りの「バレン」を輪にして、屋根に投げ上げたり、玄関先に飾って無病息災を祈っている。

英彦山参詣道日田道の要衝の地として栄えた面影を残す町並みと、その中で行われる添田神社の神幸祭は、当時の繁栄により育まれた人々の営みと文化を今に伝えており、本町の歴史文化の特性といえる。



岩石山と添田本町のまち並み



添田神社の神幸祭の様子

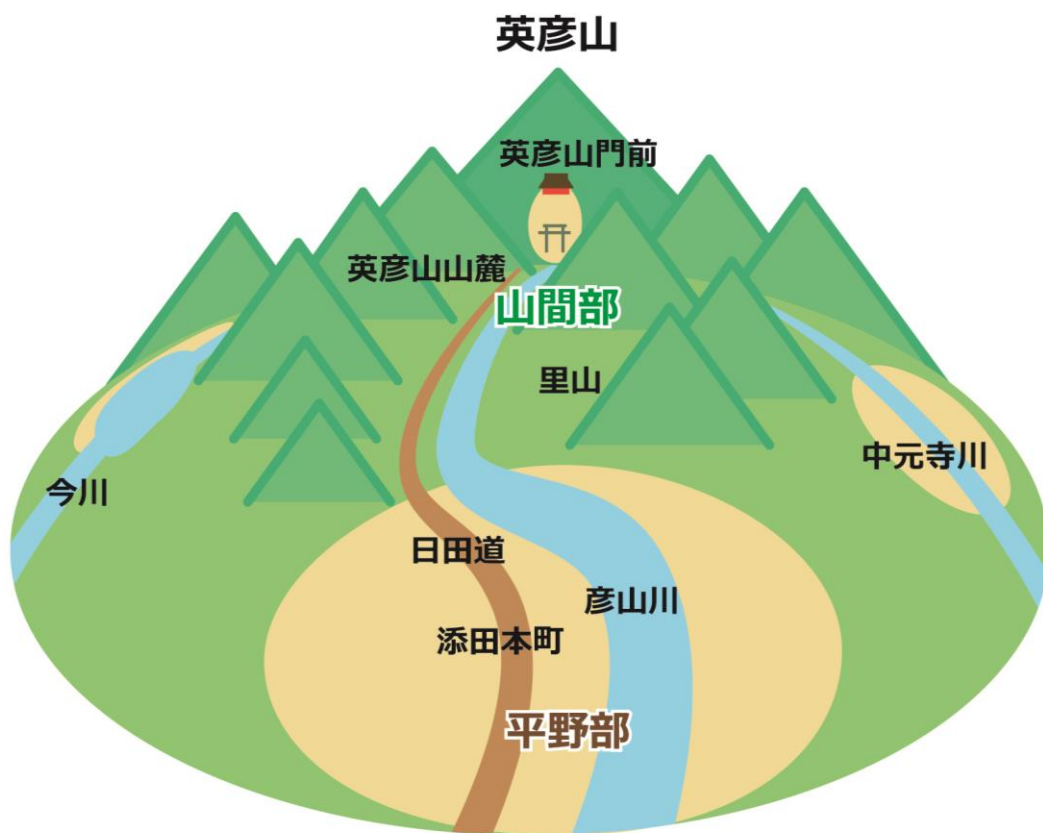


添田神社の神幸祭の様子

2. 歴史文化の特性のまとめ

本町の歴史文化の特性は、英彦山を中心として人々が往来し、文化を創造し、歴史を刻むことで、独自の歴史文化が育まれてきた。英彦山を頂きとする厳しくも豊かな自然環境の中で、河川沿いに人々の営みが生まれる。英彦山修験道が発展し、英彦山神宮や高住神社、英彦山門前において祭礼や民俗芸能が今日まで伝承され、九州一円から多くの人が英彦山参詣に訪れている。また、山間部の英彦山山麓や里山の集落において、英彦山を水源とする水分信仰と深く結びついた神幸祭で豊穰を祈る民俗芸能が奉納され、平野部において、英彦山参詣路日田道の要衝として添田本町が発展したことで、現在も重要文化財中島家住宅をはじめとする歴史的な町並みの中で、豪華な山車が巡幸し、かつての面影を今に伝えている。

以上を踏まえ、本町の歴史文化の特性のまとめを「霊峰英彦山の下で育まれた歴史文化」とする。



- ① 英彦山を頂とする厳しくも豊かな自然環境
- ② 英彦山から流れる河川沿いに広がる黎明期の人々の営み
- ③ 英彦山修験道の伝統行事
- ④ 英彦山山麓に伝承された盆踊り
- ⑤ 英彦山権現講をはじめとする多様化する英彦山詣で
- ⑥ 里山にひろがる農耕と奉納芸能
- ⑦ 英彦山参詣道「日田道」と添田本町のまつり